

③書型

- 1 大本〈おおほん〉・美濃判 美濃判の紙を二つ折りにした大きさ（27×18～19cm、B5判大学ノートサイズ）の本。古活字版・仏書・神道書・医書・漢籍などの「物之本」といわれるかたい本、仮名草子・浮世草子の大部分がこの大きさです。
- 2 中本〈ちゅうほん〉 大本の半分の大きさの本（19×13cm）。赤本・黒本・黄表紙・合巻・人情本・滑稽本などがこの大きさで作られました。娯楽読物が中心。
- 3 半紙本〈はんしばん〉 半紙を二つ折りにした大きさの本（24×16cm）。江戸時代中期以降、俳諧・浄瑠璃・狂歌・読本などがこの大きさで作られました。現在の菊判とほぼ同型。
- 4 小本〈こほん〉 半紙本の半分の大きさの本（17×12cm）。洒落本や・人名録等実用書に多い大きさです。現今の文庫本より心持大きい程度。蒟蒻に似た型という事もあって、特にこの型の多かった洒落本などに蒟蒻本の称がありました。
- 5 特大本〈とくおおほん〉 大本より大型の本。
- 6 特小本〈とくこほん〉 小本より小型の本。豆本・寸珍本・袖珍本〈しゅうちんぼん〉など。
- 7 枱形本〈ますがたぼん〉 ほぼ正方形（枱の形）の本。
- 8 横本〈よこほん〉 縦より横が長い本。
- 9 縦長本〈たてながぼん〉 大本や半紙本と比べ、横の長さが特に短い本。清朝唐本や朝鮮本に多い。



④成立

写本 手で書かれた本を、写本〈しゃほん〉と言います。日本最古の写本は、推古23（615）年頃の、聖徳太子の筆になる『法華義疏〈ほっけぎしよ〉』だと言われています。江戸時代には、版本を書写するほか、軍記ものなどの需要の多い本や実録物、風刺や批判を含んでいて刊行できない種類の本は貸本屋などが書写して貸し出すことも行われています。

版本 印刷した本を版本〈はんぼん〉と言います。刊本〈かんぼん〉とも呼ばれ、板本と書かれることもあります。

・古版本〈こはんぼん〉

日本の印刷は、奈良時代、神護景雲四年（770）に完成した『百万塔陀羅尼經（無垢浄光經）』に始まります。平安中期から室町末期には、寺院を中心として、仏書や漢籍が出版されていました。江戸初期以降に盛んとなる版本と区別して、これらを特に、古版本と呼びます。興福寺・春日大社で出された春日版、高野山の寺院で出された高野版、比叡山延暦寺で出された叡山版、京都五山・鎌倉五山などで出された五山版のほか、東大寺版・西大寺版・法隆寺版・東寺版・根来版・浄土教版などがありました。

- ・古活字版〈こかつじばん〉 室町末期から江戸初期のごく短い期間に行われた、銅活字・木活字を用いた版本。出版者により、キリシタン版・文禄勅版・慶長勅版・元和勅版・伏見版・駿河版・甫庵版・直江版・要法寺版・宗存版・嵯峨本などの名称があります。
※嵯峨本
- ・整版〈せいばん〉 薄い紙に本文を清書して版下〈はんした〉を作り、それを裏向きに板に貼り付けて上から彫刻し、その版木に墨をつけ、上から紙をあてて馬棟〈ばれん〉でこすって印刷したもの。寛永以降、古活字版にかわって再び盛んになり、江戸時代を通じて広く行われました。この技術により、挿絵が簡単に入り、文字を古文書のような連綿体で表現しやすくなりました。



嵯峨本 慶長版『伊勢物語』
川舟による水運開発で知られた角倉了意の子、角倉素庵が、慶長13年（1608）以降、一連の豪華な木活字による版本を出版した。本阿弥光悦が協力したとされることから「光悦本」とも呼ばれる。

⑤江戸の出版と本の流通

江戸時代には「本屋」といわれる出版・流通・小売を行う商人が三都だけでなく地方でも多数現れました。本屋のなかには貸本・古本屋や他商売を兼ねる者もいました。本屋は海賊版などの取締りのため仲間を形成し、幕府も出版統制のため三都の本屋の仲間を公認しました。元来は「物之本」といわれる学問的な本の出版が多かったのですが、次第に大衆化して実用書や小説、絵本などが発行されるようになっていきます。

絵入りの草紙や摺物を扱う草紙屋といわれる出版業者もいました。近世前期は紙や紙製品の扇や雛人形なども扱っていたようです。後期には本屋をしのぐ人気となり、草紙屋と本屋を兼ねる者も現れました。

浄瑠璃本屋は浄瑠璃の正本を扱いましたが、後には本屋に統合されていきます。

また素人・仲間などによる自費(蔵板)出版もさかんでした。歳旦・番付などの配り物などを専門とする板木師もいました。



江戸の絵草紙店 蔦屋重三郎

大坂心齋橋通の本屋

